



日本文学全集 別巻 1



現代名作集

野菊の墓 蟹工船
桜島 二十四の瞳他



河出書房

日本文学全集 別巻 1 現代名作集



© 1973

責任編集

武者小路実篤 川端康成
石坂洋次郎 山本健吉
瀬沼茂樹

昭和46年12月20日 初版発行
昭和57年11月1日 4版発行

編	者	瀬	沼	茂	樹
発	行	山	本	健	吉
印	刷	佐	藤	皓	三
装	者	和	田	彰	三
	幀	原			弘
印	製	刷・東洋印刷株式会社			
		本・中央精版印刷株式会社			

発行所 東京都渋谷区千駄ヶ谷2-32-2 株式会社 河出書房新社

電話東京(404)大代表 1201
振替口座 東京 0-10802

落丁本・乱丁本はお取替いたします
定価はカバー・帯にあります

Printed in Japan

目次

野菊の墓	伊藤左千夫	五
千鳥	鈴木三重吉	六
檸檬	梶井基次郎	五
蟹工船	小林多喜二	四
山月記	中島 敦	三
聖ヨハネ病院にて	上林 暁	四
桜島	梅崎春生	五
夕鶴	木下順二	六
二十四の瞳	壺井 栄	七
楢山節考	深沢七郎	三

年 譜

文学入門

小久保実 五九

瀬沼茂樹 七九

現代名作集

野 菊 の 墓

伊 藤 左 千 夫

後の月という時分が来ると、どうも思わずには居られない。幼い訣けつとは思うが何分にも忘れることが出来ない。もはや十年余も過去った昔のことであるから、細かい事実は多くは覚えて居ないけれど、心持だけは今なお昨日の如く、その時の事を考えてると、全く当時の心持に立ち返って、涙が留めどなく湧くのである。悲しくもあり楽しくもありというような状態で、忘れようと思うこともないではないが、寧ろ繰返し繰返し考えては、夢幻まげんの興味を貪むさぼつて居る事が多い。そんな訣から一寸物に書いて置こうかという氣になつたのである。

僕の家というのは、松戸から二里ばかり下つて、矢切の渡を東へ渡り、小高い岡の上でやはり矢切村と云つてゐる所。矢切の斎藤と云えば、この界限かいげんでの旧家で、里見の崩れが二三人ここへ落ちて百姓になつた内の一人が斎藤と云つたのだと祖父から聞いて居る。屋敷の西側に一

丈五六尺も廻るような椎の樹が四五本重なり合つて立つて居る。村一番の忌森いもりで村じゅうから羨ましがられて居る。昔から何ほど暴風あらしが吹いても、この椎森のために、僕の家ばかりは屋根を剥はがれたことはただの一度もないとの話だ。家なども随分と古い、柱が残らず椎の木だ。それがまた煤すすやら垢かたやらで何の木か見別けがつかぬ位、奥の間の最も煙に遠いところでも、天井板がまるで油炭で塗った様に、板の木目も判らぬほど黒い。それでも建ちは割合に高くて、簡単な欄間もあり銅の釘隠くぎかくしなども打つてある。その釘隠が馬鹿に大きい雁かりであつた。勿論一寸見たのでは木か金かも知れないほど古びている。

僕の母なども先祖の言い伝えだからといって、この戦国時代の遺物的古家を、大へんに自慢されていた。その頃母は血の道で久しく煩わづらつて居られ、黒塗的な奥の間がいつも母の病褥びやうぶととなつて居た。その次の十畳の間の南隅みなぐみに、二畳の小座敷がある。僕が居ない時は機織はたオリ場で、僕が居る内は僕の読書室にしていた。手摺窓の障子を明けて頭を出すと、椎の枝が青空を遮さへぎつて北を掩おほうてゐる。

母が永らくぶらぶらして居たから、市川の親類で僕には縁ゆかりの従妹じょうまいになつて居る、民子という女の兄が仕事の手伝やら母の看護やらに来て居つた。僕が今忘れることが出来ないというのは、その民子と僕との関係である。そ

の関係と云つても、僕は民子と下劣な関係をしたのではない。

僕は小学校を卒業したばかりで十五歳、月を数えると十三歳何ヶ月という頃、民子は十七だけれどそれも生れが晚いから、十五と少しにしかならない。瘦せぎすであつたけれども顔は丸い方で、透き徹るほど白い皮膚に紅味をおんだ、誠に光沢の好い児であつた。いつでも活々として元気がよく、その癖氣は弱くて憎氣の少しもない児であつた。

勿論僕とは大の仲好しで、座敷を掃くと云つては僕の所をのぞく、障子をはたと云つては僕の座敷へ這入ってくる、私も本が読みたいの手習がしたいのと云う、たまにはハタキの柄で僕の背中を突いたり、僕の耳を摘まんだりして逃げてゆく。僕も民子の姿を見れば来い来いと云うて二人で遊ぶのが何より面白かつた。

母からいつでも叱られる。

「また民やは政の所へ這入ってるナ。コラアさつさと掃除をやつてしまえ。これからは政の読書の邪魔などしてはいけません。民やは年上の癖に……」

などと頻りに小言を云うけれど、その実母も民子をはじめ非常に可愛がつて居るのだから、一向に小言がきかない。私にも少し手習をさして……などと時々民子はだだをいう。そういう時の母の小言もきまつている。

「お前は手習やか裁縫です。着物が満足に縫えなくては女一人前として嫁にゆかれません」

この頃僕に一点の邪念が無かつたは勿論であれど、民子の方にも、いやな考えなどは少しも無かつたに相違ない。しかし母がよく小言を云うにも拘らず、民子はなお朝の御飯だ昼の御飯だというては僕を呼びにくる。呼びにくる度に、急いで這入つて来て、本を見せろの筆を借せのと云つてはしばらく遊んでいる。その間にも母の薬を持つてきた帰りや、母の用を達した帰りには、きつと僕の所へ這入ってくる。僕も民子がのぞかない日は何となく淋しく物足らず思われた。今日は民さんは何をしているかなと思ひ出すと、ふらふらと書室を出る。民子を見にゆくというほどの心ではないが、一寸民子の姿が目に触れば氣が落着くのであつた。何のこつたやっぱり民子を見に来たんじゃないかと、自分で自分を嘲つた様なことがしばしばあつたのである。

村の或家さ警女がとまつたから聴きにゆかないか、祭文がきたから聴きに行こうのと近所の女共が誘うても、民子は何とか断りを云うて決して家を出ない。隣村の祭で花火や飾物があるからとの事で、例の向うのお浜や隣のお仙等が大騒ぎして見にゆくというに、内のものらまで民さんも一所に行つて見てきたらと云うても、民子は母の病氣を言い前にして行かない。僕も余りそんな所へ

出るは嫌であつたから家に居る。民子は狐鼠狐鼠と僕の所へ這入つてきて、小声で、私は内に居るのが一番面白いわと云つてニッコリ笑う。僕も何となし民子をばそんな所へやりたくなかつた。

僕が三日置き四日置きに母の薬を取りに松戸へゆく。どうかすると帰りが晩くなる。民子は三度も四度も裏坂の上まで出て渡しの方を見ていたそうで、いつでも家中のものに冷かされる。民子は真面目になつて、お母さんが心配して、見てお出で見てお出でというからだといふ訣をする。家の者は皆ひそひそ笑つてゐるとの話であつた。

そういう次第だから、作おんなのお増などは、無上と民子を小面憎がつて、何かというと、

「民子さんは政夫さんとこへ許り行きたがる、隙さえあれば政夫さんにこびりついてゐる」

などと頻りに云いはやしたらしく、隣のお仙や向うのお浜等までかれこれ噂をする。これを聞いてか、嬢が母に注意したらしく、或日母は常になくむずかしい顔をして、二人を枕もとへ呼びつけ意味有り気な小言を云うた。

「男も女も十五六になればもはや児供ではない。お前等二人が余り仲が好過ぎるとて人がかれこれ云うそうじや。氣をつけなくてはいけない。民子が年かきの癖によ

くない。これからはもう決して政の所へなど行くことはならぬ。吾子を許すではないが政は未だ児供だ。民や十七ではないか。つまらぬ噂をされるとお前の体に疵がつく。政夫だつて氣をつけろ……。来月から千葉の中学へ行くんじゃないか」

民子は年が多いし且は意味あつて僕の所へゆくであらうと思われたと氣がついたか、非常に愧じ入つた様子に、顔真赤にして俯向いてゐる。常は母に少し位小言云われても随分だだをいうのだけれど、この日はただ両手をついて俯向いたきり一言もいわない。何の疚しい所のない僕は頗る不平で、

「お母さん、そりや余り御無理です。人が何と云つたつて、私等は何の訣もないのに、何か大変悪いことでもした様なお小言じゃありませんか。お母さんだつていつもそう云つてたじゃありませんか。民子とお前とは兄弟も同じだ、お母さんの眼からはお前も民子も少しも隔てはない、仲よくしろよといつても云つたじゃありませんか」

母の心配も道理のあることだが、僕等もそんないやらしいことを云われようとは少しも思つて居なかつたら、僕の不平もいくらかの理はある。母は俄にやさしくなつて、

「お前達に何の訣もないことはお母さんも知つてゐるが

ネ、人の口がうるさいから、ただこれから少し気をつけ
てと云うのです」

色青ざめた母の顔にもいつしか僕等を真から可愛がる
笑みが湛えて居る。やがて、

「民やはあのまた葉を持つてきて、それから縫掛けの袖
を今日中に仕上げてしまいなさい……。政は立った次手
に花を剪つて仏壇へ捧げて下さい。菊はまだ咲かない
か、そんなら紫苑でも切ってくれよ」

本人達は何の気なしであるのに、人がかれこれ云うの
でかえって無邪気でいられない様になってしまう。僕は母
の小言も一日しか覚えていない。二三日たつて民さんは
なぜ近頃は来ないのか知らんと思つた位であつたけれ
ど、民子の方では、それからというものは様子がからつ
と變つてしもうた。

民子はその後僕の所へは一切顔出ししないばかりでな
く、座敷の内で行逢つても、人のいる前などでは容易に
物も云わない。何となく極りるやうに、まぶしい様な
風で急いで通り過ぎて終う。扱処なく物を云うにも、今
までの無遠慮に隔てのない風はなく、いやに丁寧に改ま
つて口をきくのである。時には僕が余り俄に改まったの
を可笑しがつて笑えば、民子も遂には袖で笑いを隠して
逃げてしまふという風で、とにかく一重の垣が二人の間
に結ばれた様な気合になった。

それでも或日の四時過ぎに、母の云いつけで僕が背戸
の茄子畑に茄子をもいで居ると、いつのまにか民子が箒
を手にとって、僕の後にきていた。

「政夫さん……」

出し抜けに呼んで笑っている。

「私もお母さんから云いつかつて来たのよ。今日の縫物
は肩が凝つたらう、少し休みながら茄子をもいできてく
れ。明日麴漬をつけるからつて、お母さんがそう云うか
ら、私飛んできました」

民子は非常に嬉しやうに元気一パイで、僕が、

「それでは僕が先にきているのを民さんは知らないで来
たの」

と云うと民子は、

「知らなくてサ」

にこにこしながら茄子を採り始める。

茄子畑というは、椎森の下から一重の藪を通り抜け
て、家より西北に当る裏の前栽畑。崖の上になつてゐるの
で、利根川は勿論中川までもかすかに見え、武蔵一えん
が見渡される。秩父から足柄箱根の山々、富士の高峯も
見える。東京の上野の森だと云うのもそれらしく見える。
水のように澄みきつた秋の空、日は一間半ばかりの
辺に傾いて、僕等二人が立つて居る茄子畑を正面に照り
返して居る。あたり一体にシンとしてまた如何にもハッ

キリとした景色、吾等二人は真に画中の人である。

「マア何という好い景色でしょう」

民子もしばらく手をやめて立った。

僕はここで白状するが、この時の僕は慥に十日以前の僕ではなかった。二人は決してこの時無邪気な友達ではなかった。いつの間にそういう心持が起って居たか、自分には少しも判らなかつたが、やはり母に叱られた頃から、僕の胸の中にも小さな恋の卵が幾個か湧きそめて居たに違いない。僕の精神状態がいつの間にか変化してきたは、隠すことの出来ない事実である。この日初めて民子を女として思ったのが、僕に邪念の萌芽ありし何よりの証拠じゃ。

民子が体をくの字にかがめて、茄子をもぎつつあるその横顔を見て、今更のように民子の美しく可愛らしさに気がついた。これまでにも可愛らしいと思わぬことはなかったが、今日はしみじみとその美しさが身にしみた。しなやかに光沢のある髪（びん）の毛につつまれた耳たぶ、豊かな頬の白く鮮かな、顎のくくしめの愛らしさ、顎のあたりに如何にも清げなる、藤色の半襟（はんきん）や花染の襷（たすき）や、それらが悉く優美に眼にとまった。そうなると恐ろしいもので、物を云うにも思い切った言は云えなくなる、羞かしくなる、極りが悪くなる、皆例の卵の作用から起ることであらう。

ここの十日ほど仲垣の隔てが出来て、ロクロク話もせなかつたから、これも今までならば無論そんなこと考えもせぬにきまつて居るが、今日はここで何か話さねばならぬ様な気がした。僕は初め無造作に民さんと呼んだけれど、跡は無造作に詞（ことば）が継がない。おかしく喉がつまつて声が出ない。民子は茄子を一つ手に持ちながら体を起して、

「政夫さん、なに……」

「何でもないけど民さんは近頃へんだからさ。僕なんかすっかり嫌いになったようだよ」

民子はさすがに女性（にょしやう）で、そういうことには僕などより遙に神経が鋭敏になっている。さも口惜（くし）しそうな顔して、つと僕の側へ寄ってきた。

「政夫さんはあんまりだわ。私がいつ政夫さんに隔てをしました……」

「何さ、この頃民さんは、すっかり変っちゃまつて、僕なんかには用はないらしいからよ。それだって民さんに不足を云う訣ではないよ」

民子はせきこんで、

「そんな事いうはそりゃ政夫さんひどいわ、御無理だわ。この間は二人を並べて置いて、お母さんにあんなに叱られたじゃありませんか。あなたは男ですから平気でお出でだけど、私は年は多いし女ですもの、あア云われ

ては実に面目がないじゃありませんか。それでですから、私は一生懸命になってたしなんで居るんです。それを政夫さん隔てるの嫌になつたらうのと云うんだもの、私はほんとにつまらない……」

民子は泣き出しそうな顔つきで僕の顔をじいッと視ている。僕もただ話の小口にそう云うたまでであるから、民子に泣きそうになられては、かわいそうに気の毒になつて、

「僕は腹を立てて言つたでは無いのに、民さんは腹を立つたの……僕はただ民さんが俄に變つて、逢つても口もきかず、遊びにも来ないから、いやに淋しく悲しくなつちまつたのさ。それだからこれからも時々遊びにお出でよ。お母さんに叱られたら僕が咎を背負うから……人が何と云つたつてよいじゃないか」

何というても児供だけに無茶なことをいう。無茶なことを云われて民子は心配やら嬉しいやら、嬉しいやら心配やら、心配と嬉しいとが胸の中で、ごつたになつて争うたけれど、とうとう嬉しい方が勝を占めて終つた。なお三言四言話をするうちに、民子は鮮かな曇りのない元の元氣になった。僕も勿論愉快が溢れる……、宇宙間にただ二人きり居るような心持にお互になつたのである。やがて二人は茄子のもぎくらす。大きな畑だけれど、十月の半過ぎでは、茄子もちらほらしかなくて居な

い。二人で漸く二升ばかり宛を採り得た。

「まア民さん、御覧なさい、入日の立派なこと」

民子はいつしか策を下へ置き、両手を鼻の先に合せて太陽を拝んでいる。西の方の空は一体に薄紫にぼかした様な色になった。ひた赤く赤いばかりで光線の出ない太陽が今その半分を山に埋めかけた処、僕は民子が一心入日を拝むしおらしい姿が永く眼に残つてゐる。

二人が余念なく話をしながら帰つてくると、背戸口の四つ目垣の外にお増がぼんやり立って、こつちを見て居る。民子は小声で、

「お増がまた何とか云いますよ」

「二人共お母さんに云いつかつて来たのだから、お増なんか何と云つたつて、かまやしないさ」

一事件を経る度に二人が胸中に湧いた恋の卵は層を増してくる。機に触れて交換する双方の意志は、直に互いの胸中にある例の卵に至大な養分を給与する。今日の日暮はたしかにその機であつた。ぞつと身振いをするほど、著しき徴候を現したのである。しかし何というても二人の關係は卯時代で極めて取りとめがない。人に見られて見苦しい様なこともせず、顧みて自ら疚しい様なこともせぬ。従つてまだまだ暢氣なもので、人前を繕うと云う様な心持は極めて少なかった。僕と民子との關係も、この位でお終いになつたならば、十年忘れられない

というほどにはならなかっただろうに。

親というものはこの親も同じで、吾子をいつまでも児供のように思っている。僕の母などもその一人に漏れない。民子はその後時折僕の書室へやってくるけれど、よほど人目を計らって気ほねを折ってくる様な風で、いつきても少しも落着かない。先に僕に厭味を云われたから仕方なしにくるかとも思われたが、それは間違っていた。僕等二人の精神状態は二三日と云われぬほど著しき変化を遂げている。僕の変化は最も甚しい。三日前には、お母さんが叱れば私が科を背負うから遊びにきてとまで無茶を云うた僕が、今日はとてもそんな訣のものでない。民子が少し長居をすると、もう気が咎めて心配でならなくなった。

「民さん、またお出よ、余り長く居ると人がつまらぬことを云うから」

民子も心持は同じだけれど、僕にもう行けと云われると妙にすねだす。

「あれあなたは先日何と云いました。人が何と云ったッてよいから遊びに来いと云いはしませんか。私はもう人に笑われてもかまいませんの」

困った事になった。二人の關係が密接するほど、人目を恐れてくる。人目を恐れる様になっては、もはや罪惡を犯しつつあるかの如く、心もおどおどするのであつ

た。母は口でこそ、男も女も十五六になれば児供ではないと云つても、それは理窟の上のことで、心持ではまだまだ二人をまるで児供の様に思っているから、その後民子が僕の室へきて本を見たり話をしたりしているのを、直ぐ前を通りながら一向気に留める様子もない。この間の小言も実は、嫂が言うから出たまでで、ほんとうに腹から出た小言ではない。母の方はそうであつたけれど、兄や嫂やお増などは、盛に蔭言をいうて笑つていたらしく、村中の評判には、二つも年の多いのを嫁にする気かしらんなどと、專^{もっぱら}いうているとの話。それやこれやのことが薄々二人に知れたので、僕から言いだして当分二人は遠ざかる相談をした。

人間の心持というものは不思議なもの。二人が少しも隔意なき得心上の相談であつただけれど、僕の方から言い出したばかりに、民子は妙に鬱ぎ込んで、まるで元気がなくなり、悄然^{しやうぜん}としていたのである。それを見ると僕もまたたまらなく気の毒になる。感情の一進一退はこんな風にもつれつつ危くなるのである。とにかく二人は表面だけは立派に遠ざかつて四五日を経過した。

陰曆の九月十三日、今夜が豆の月だという日の朝、露霜が降りたと思うほどつめたい。その代り天気はきらきらしている。十五日がこの村の祭で明日は宵祭という訣

故、野の仕事も今日一渡り極りをつけねばならぬ所から、家中手分けをして野へ出ることにした。それで甘露の恩命が僕等兩人に下ったのである。兄夫婦とお増と外に男一人とは中稻の刈残りを是非刈って終わねばならぬ。民子は僕を手伝いとして山畑の棉を採ってくることになった。これはもとより母の指図で誰にも異議は云えない。

「マアあの二人を山の畑へ遣るッて、親というものはよッぽどお目出たいものだ」

奥底のないお増と意地曲りの嫂とは口を揃えてそう云ったに違いない。僕等二人はもとより心の底では嬉しいに相違ないけれど、この場合二人で山畑へゆくとなつては、人に顔を見られる様な気がして大いに極りが悪い。義理にも進んで行きたがる様な素振りはい出来ない。僕は朝飯前は書室を出ない。民子も何か愚図愚図して支度もせぬ様子。もう嬉しがってと云われるのが口惜しいのである。母は起きてきて、

「政夫も支度しろ。民やもさっさと支度して早く行け。

二人でゆけば一日には楽な仕事だけれど、道が遠いのだから、早く行かないと帰りが夜になる。なるたけ日の暮れない内に帰ってくる様によ。お増は二人の弁当を拵えてやってくれ。お菜はこれこれの物で……」

まことに親のこころだ。民子に弁当を拵えさせては、

自分のであるから、お菜などはロクな物を持って行かないと気がついて、ちゃんとお増に命じて拵えさせたのである。僕はズボン下に足袋裸足麦藁帽という出で立ち、民子は手指を佩いて股引も佩いてゆけと母が云うと、手指ばかり佩いて股引佩くのにくずくずしている。民子は僕のところへきて、股引佩かないでもよい様にお母さんにそう云ってくれと云う。僕は民さんがそう云いなさいと云う。押問答をしている内に、母はききつけて笑いがら、

「民やは町場者だから、股引佩くのは極りが悪いかい。私はまたお前が柔かい手足へ、茨や薄で傷をつけるが可哀相だから、そう云ったんだが、いやだと云うならお前のすきにするがよいさ」

それで民子は、例の襟に前掛姿で麻裏草履という支度。二人が一斗笠一個宛を持ち、僕が別に番ニヨ片籠と天秤とを肩にして出掛ける。民子が跡から菅笠を被って出ると、母が笑声で呼びかける。

「民や、お前が菅笠を被って歩くと、ちょうど木の子が歩くようで見つともない。編笠がよからう。新らしいのが一つあった筈だ」

稲刈連は出てしまつて別に笑うものもなかったけれど、民子はあわてて菅笠を脱いで、顔を赤くしたらしかった。今度は編笠を被らずに手に持つて、それじゃお母

さんいつてまいりますと挨拶して走って出た。

村のものもかれこれいうと聞いているので、二人揃うてゆくも人前恥かしく、急いで村を通抜けようとの考えから、僕は一足先になって出掛ける。村はずれの坂の降口の大きな銀杏の樹の根で民子のくるのを待った。ここから見おろすと少しの田圃がある。色よく黄ばんだ晩稻に露をおんで、シットリと打伏した光景は、気のせいから殊に清々しく、胸のすくような眺めである。民子はいつの間にか来ていて、昨日の雨で洗い流した赤土の上に、二葉三葉銀杏の葉の落ちるのを拾っている。

「民さん、もうきたかい。この天気の良いことどうです。ほんとに心持のよい朝だねイ」

「ほんとに天気がよくて嬉しいわ。このまア銀杏の葉の綺麗なこと。さア出掛けましょう」

民子の美しい手で持つてると銀杏の葉も殊に綺麗に見える。二人は坂を降りてようやく窮屈な場所から広場へ出た気になった。今日は大きいそぎで棉を採り片付け、さんざん面白いことをして遊ぼうなどと相談しながら歩く。道の真中は乾いているが、両側の田についている所は、露にしとしと濡れて、いろいろの草が花を開いている。タウコギは未枯れて、水蕎麦など一番多く繁っている。都草も黄色く花が見える。野菊がよろよろと咲いている。民さんこれ野菊かと僕は吾知らず足を留めたい

れど、民子は聞えないのかさつさと先へゆく。僕は一寸脇へ物を置いて、野菊の花を一握り採った。

民子は一町ほど先へ行ってから、気がついて振り返るや否や、あれッと叫んで駆け戻ってきた。

「民さんはそんなに戻ってきないッたつて僕が行くものを……」

「まア政夫さんは何をしていたの。私びっくりして……まア綺麗な野菊、政夫さん、私に半分おくれッたら、私ほんとうに野菊が好き」

「僕はもとから野菊がだい好き。民さんも野菊が好き……」

「私なんでも野菊の生れ返りよ。野菊の花を見ると身振いの出るほど好ましいの。どうしてこんなかと、自分でも思う位」

「民さんはそんなに野菊が好き……道理でどうやら民さんは野菊のような人だ」

民子は分けてやった半分の野菊を顔に押しあてて嬉しがった。二人は歩きだす。

「政夫さん……私野菊の様だってどうしてですか」

「さアどうしてということはないけど、民さんは何がなし野菊の様な風だからさ」

「それで政夫さんは野菊が好きだって……」

「僕大好きさ」

民子はこれからああなたが先になつてと云いながら、自らは後になつた。今の偶然に起つた簡単な問答は、お互の胸に強く有意味に感じた。民子もそう思つた事はその素振りで見える。ここまで話が迫ると、もうその先を言ひ出すことは出来ない。話は一寸途切れてしまつた。

何と言つても幼い兩人は、今罪の神に翻弄はんろうせられつつあるのであれど、野菊の様な人だと云つた詞について、その野菊を僕はだいい好きだと云つた時すら、僕は既に動悸きを起した位で、直ぐにそれ以上を言ひ出すほどに、まだまだずうずうしくはなつていない。民子も同じこと、物に突きあたつた様な心持で強くお互に感じた時に声はつまつてしまつたのだ。二人はしばらく無言で歩く。

真まことに民子は野菊の様な児であつた。民子は全くの田舎風ではあつたが、決して粗野ではなかつた。可憐かれんで優しくてそうして品格もあつた。獣味とか憎気とかいふ所は爪かたの垢かたほどでもなかつた。どう見ても野菊の風だつた。

しばらくは黙つていたけれど、いつまで話もしないでいるはなおおかしい様に思つて、無理と話を考え出す。

「民さんはさつき何を考へてあんなに脇見もしないで歩いてゐたの」

「わたし何も考へていやしません」

「民さんはそりや嘘だよ。何か考へごとでもしなくてあんな風をする訣はないさ。どんなことを考へてゐたのか

知らないけれど、隠さないだつてよいじゃないか」

「政夫さん、濟まない。私さつきほんとに考事かんがへごとしてゐました。私つくづく考へて情なくなつたの。わたしはどうして政夫さんよか年が多いんでしよう。私は十七だと言うんだもの、ほんとに情なくなるわ……」

「民さんは何のこと言うんだらう。先に生れたから年が多い、十七年育つたから十七になつたのじゃないか。十七だから何で情ないのですか。僕だって、さ来年になれば十七歳さ。民さんはほんとに妙なことを云う人だ」

僕も今民子が言つたことの心を解せぬほど児供でもない。解つてはいるけど、わざと戯れの様に聞きなして、振りかへつて見ると、民子は真に考え込んでゐる様であつたが、僕と顔合せて極りわるげににわかに側わきを向いた。

こうなつてくると何をいうても、直ぐそこへ持つてくるので話がゆきつまつてしまふ。二人の内でもどちらか一人が、すこしほんの僅かにでも押が強ければ、こんなに話がゆきつまるのではない。お互に心持は奥底まで解つてゐるのだから、吉野紙を突破するほどにも力があつてえすれば、話の一步を進めてお互に開放してしまふことが出来るのである。しかしながら真底からおぼこな二人は、その吉野紙を破るほどの押がないのである。またここで話の皮を切つてしまわねばならぬと云う様な、はっ